



號月三 卷一十第

□多くの人々は誰としてよくなることを好まないものはない。乍然それにもかゝらず、割合に善事を爲さずして悪事を爲す人の多いのはどうしたわけであらうか。

□昔から悪い事してよくなるわけもなく、又善いことをして悪くなる道理もないのに何故に人は善くなることを欲し乍ら、善くなる事をしてないで悪いことをなし、悪くなることを好まないで、その實悪いことをのみ爲さうとするのであらうか。

□之をたゞ、それが凡夫だからだとすゝておく人もあるがそこには何か間違つた考へが私共の心の中にあるからではあるまいか。世の中に眞に悪いと知りながら、自分の爲めにならないことをどうしてやることができらうか。

□恐らくその人は「悪いには遠いながさうなることが實は自分の爲めになることだ」と云ふやうな考へがあるではなからうか。それと同じく、又善と知りながらそれをやらないで悪いと思ふ方に留まると云ふことも、その實は善いことはやればよいには遠いがないが、それでもそれをやらない方が自分には都合がよいと思ふからではあるまいか。

□つまりと云ふ、之は善惡の考へが自分の生活とまた本當に一致しないが爲めである。従つて、之等の人には善とか惡とか云ふことが自身の爲めの善惡とは全く反するものと思はれてゐるからである。

□乍然今までの道徳は自分の身を犠牲にしなければ善でなく、自分の爲めになるものは惡であると思はれた、そこに多くの人々が善はしたいが、自分の爲めにならぬからやりたくない、惡はいかぬ事だが、自分の爲めになることだから仕方がないと云ふやうな考へがあるのであるまいか。

□佛教の理想が自他不二と云ふことは自覺と覺他とが一になり、菩薩の大業が身を殺して仁を爲すと云ふことは其の實、本當に自己を生かすの道だからである。（觀道）

光明禮拜儀懺悔文を拜讀して

龍堂

自身は現に是れ罪惡の凡夫、

毛蟲生むものとも見えぬ胡蝶かな。

心の至らざるよりして作すべからざる罪を造り、

雪折やいつか入れたる斧の傷。

作すべき事を怠るの罪に陥れり、

子子や何を日ねもす浮き沈み。

是れ皆自らの過りなり。實に大なる過りなることを感じて至心に懺悔

し奉る、

傘貸さぬ人は恨まし花の雨。

今よりは悔い改め邪惡を捨て正喜に就かんことを誓ひ奉る、

畑代へて今年は植ゑむ菊の苗。

願くは恩寵に依て再び過に陥ることなく正しき人となさしき給へ、

早蕨や拳に見ゆる日の力。

目次

今後の佛教 念

法然上人の誕生 土屋觀道

人生の眞意義(一) 土屋觀道述
安田恢順記

日華周遊所感 土屋觀道

支部通信

其他

今 後 の 佛 教

今までの佛教はともすればそれも因縁で、之も因果だと云ふ風に、すべてを過去の原因にかこつけ、現在の苦難を忘れやうとした。乍然今から之を考へればそれは本當の佛教の見方ではなかつた。本當の佛教は之に反して、一切を之からに見直すべきものである。何となれば迷を轉じて悟りを開き、誤りを改めて正しきにつくのが眞實の佛教であるからである。

それを知らずして、現在をすべて過去の業因の然らしむるところとして、今後に對する新しき理想と之を實現すべき眞實の努力とが無いならば、今日の私達はいづれの時にか本當の人生が展開して來るときがあり得やう。従て佛教に因果を説くと云ふことは寧ろ今後に於ける人類の世界を理想の世界に至らしむる努力の世界を暗示するものと云ふべきである。

佛教では一切を自業自得と云ふ、それは自らの理想を自らに得るには自らの努力を必要とすることを示すものとして極説したものと云つてよい。善も惡も自業自得なればこそ、現在に於てあきらめも出來れば將來に對して、眞實の努力も出來るではないか。

此の事はあらゆる菩薩の修行と云い、釋迦の前生談はよく此の事を示し、彌陀の本願、念佛の修業もよく此の事を語つてゐる。若し因縁と因果の理法を無視するならばどこに此の理想と實現との世界があり得やう。

然に從來の佛教はともすれば現在の生活を凡て過去の原因として改造を試みず、徒に宿世の因縁として放鄭した傾きがある。之は少くとも此の土に於ける人類の努力を無視し、今日の佛教をして全く活氣を失はしめたる一大原因である。

だから今後の佛教は一切の是等の弊風を一掃して、一切の生活を新生の氣分にまで轉廻すべきである。即ち誤まれたる過去の觀念を放鄭して、更に新しき將來に對する發展策を構することを大切であると云はねばならぬ。(念)

法然上人の誕生

土屋 觀道

一、上人の置位

□本年は上人の誕生八百年に當るので其の道の關係者は上人を記念しやうとさはいひであります。従つて、かゝる際に上人の教へを崇敬する私達が上人の事について二三を述べると云ふ事は必ずしも無意義な事ではないかと思ひます。

□その中でも上人が我が國の佛教界に於て如何なる位置に居れるかと云ふことを知る事は今後の佛教を知る上に於ても亦大切な事でありませう。而もその意味から云へば我國に於ける上人の置位は全く一宗一派の如き小さき宗旨の一宗の祖にあらずして、實に聖道門に對する淨土門の祖師と云ふべき置位にある方であります。従て上人以後凡そ淨土教を説くものが上人をその祖としないものはない有様であります。

□従つて、上人以後淨土教には鎮西上人の教以外に眞宗、西山、時宗等の新しき宗派が出来ましたが一として上人をその祖師の中に入れてない宗はありません。いはゞ之等の宗派の流れの中心となるものは上人の教をくまぬものはないのであります。

□そしてまた、上人の御教へも聖道門對淨土門の立場に於て一宗を開かれたのでありまして、淨土教

の中の一宗一派と云ふやうな感へは毛頭あらせられ無つたのであります。此の意味に於て上人の立場は全く聖道門に對する淨土門の祖師と云つてよいのであります。

二、上人の御人格

□尙、上人の御人格に就て申すなら、それこそ人格圓滿なること春の日のうららかなるが如き感じの方であります。従つてその御一生の間には殆ど人と争ふと云ふやうな點が少しも見出すことができないのみならず、その學の深く徳の高きことは當代に全くその比する人がないのであります。

□更にその識見の高きにかかわらず、自ら持すること謙讓全く私共の想像も及ばぬところでありませう。尤も上人にも御若い時代には其の學問上に於てその師匠叡空上人と其の義を争はれたと云ふ話も御傳には残つて居りますが、それはたゞ眞理を愛し玉ふ上に於ては尙師とも争ひ玉ふたと云ふ位に過ぎないことであつて、それとても必ずしも普通の人が喧嘩に論をして之を争ふと云ふやうなものでは無つたのであります。

□乍然それにしても、自ら信するところを以つて一宗を御立てになり、いかなる世人の比難も攻撃もものともせず一生をその道に献けられたと云ふことは全く上人のいかにその意思の強固であらせられたかを拜することが出来るのであります。

□而も各宗に對する上人の態度は決して各宗を批難する心ではありませんでした。それは當時の佛教が悉く釋尊の説かれた經典を中心として立てられてある限り、釋尊の御教を眞實なりと信じられた上人には之を批難することができなかつたのであります。乍然それにもかゝらず何故に上人は之等の宗教に歸依することができずして、更に新しき淨土宗を立てられたのでありませう。

□それは云ふまでもなく、從來の教が自力聖道の教へであつて、戒律だの禪定だの觀法だのと云ふやう

な到底凡夫の力では及びもつかない困難な修行を要するものであつたから、自分のやうな愚な凡夫ではとてもそれではいかぬと思はれたからであります。

□そこに至ると同じ釋尊の教へでも他の淨土の法門はさうした修行のできないものでも、否、それどころか、さうした修行の出来ない人の爲めにとて教へを説かれたものであつた故、之こそ如來の本願なりとたゞ一向に信せられたのであります。そこには何等の理由もありせん。「たゞ往生極樂の爲めには南無限彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の仔細」がなかつたやうです。

□そこがまた、いかにも上人の正直なところでありましたらう。たゞ自らを罪深きもの、愚かものなりと信せられた上人は少しも自らの考へを入れずして、ひたすらに教典の教へをそのままに信するより外はないと思はれたやうであります。

□従つて、上人は外の事柄は暫く別として、此の信仰の問題に至つては全く自分の所見をさしはさまずに、たゞ／＼文面に示された通りに、自ら之を信じ、之を實行せられたやに思はれてなりません。之は各宗が悪いと云ふのではない、自分はたゞ自分の力に相應した釋尊の教阿彌陀佛の本願に歸依するより外にないとせられたやうであります。

三、上人の識見

□乍然、それにもかゝらず、上人の識見はまた一段と高きものがありました。それは教法いかに高しと雖も、末世下根の今日には時機相應と云ふものがあつて、到底普通の凡夫には念佛往生の外に眞に救はるゝの道はないと覺悟せられてゐたことでもあります。之は一面眞劍に從來の聖道門で解脱しやうとしたものでなくては到底味ふことのできない事であらうと思ひますが、上人の識見は早くも之を

見抜がれたのであります。

□しかのみならず、上人の宗教はその初め先づ自分御一人の爲めの宗教であり、求道であつたやうであります。愈々御自分でその信仰にお入りになつてからの上人はいつしかそれを以つて、多くの衆生をもそれによつて救いたいと云ふ念願に燃えられたことが明であります。「我淨土宗を建つる所以は凡夫をして報土に往生せしめんが爲めなり」とその立宗開教の御精神を述べてゐられますが、自分が淨土宗を立てなければ凡夫が淨土に往生する義が明にすることができないからだと仰せられて居ります。

□そして、之は正しく上人の一宗建立に對する此の上もない一大卓見であり、又大なる上人の識見であること云つてよいかと思ふのであります。而も時代が丁度源平盛衰の時代ではあり、平安の末期から鎌倉の初めに於けるあらゆる社會の轉廻期に於て、早くも民衆救済の淨土教を開宗宣傳せられたと云ふことは上人の如き識見の人にあらざれば誰かよく此の事を爲し得やうと言いたいのであります。

四、宗教の復活

□従つてまた、その上人の宗教も確に時代を劃する一大教義を有するものであります。少くとも上人以前の日本佛教に於ては上人を以つて日本佛教の一大轉廻と申して差支へありません。従つて上人の宗教は釋尊の佛教を大半して聖道門と淨土門となし、その淨土門を脊負つて立つた一大佛教の大系を爲すものであります。或は之を以つて、佛教の自力門より他力門に轉入する一大轉廻と云つても決して過言ではありません。

□その他、上人の宗教が從來の日本における貴族佛教を平民佛教となし、僧侶專有の佛教より在家民衆の佛教となし、單なる概念佛教より眞實信仰の實際佛教に轉せしめ、或は觀法、禪定、戒律本位の佛教

より三學（戒定慧）放棄の念佛信仰たらしめたことはいかに民衆の信仰を眞實ならしめたかと云ふ點に於て、全く古今絶無と云つてよいのであります。

□従つて、今までの人達は佛教とさへ云へば到底我等如き無學無力の凡夫に於ては及びもつかぬと斷念してゐたのが常でありました。而も之に人類の理想を與へ、此の世によるべき多くの民衆のそれらにさへ、此の世以上に未來を通して永劫に生くべき世界のあることを知らせたのは全く上人の力でありました。従つて、その後には於ける宗教は本當の意味に於ける宗教として民衆の心の中に蘇生して來たと申してもよいのであります。

□そしてまた、本當の意味に於て宗教が多くの民衆を救ふやうになつたのも之からと云つてよいのであります。従つて從來の宗教は未だ本當の意味に於て、それは民衆の宗教ではありませんでした。肉食も許さねば妻帯も許さず、常に戒定慧の三學によつてのみ此の世を解脱しやうと云ふ宗教にどうして多くの民衆が救はれませう。否、それどこか、現に多くの僧侶までが、己に自らの戒を破り禪定を修せず。智慧も磨かぬと云ふことが實際でありましたことは必ずしも上人の當時に始つたことではありませんでした。

□況んや、上人當時の社會の腐敗、制度の紊亂、道德の敗退、僧侶共に全く一切が行詰つてしまつたときでありました。従つて、若しも佛教があると云ふならばそれはたゞ名のみ佛教でありまして、佛教の實質は己に遠の昔に無くなつてゐたのであります。

□それを上人の宗教が肉食の中からも妻帯の中からも、否いかに罪業深重の惡凡夫の中からも如來を頼む信の一念から南無阿彌陀佛と稱ふるものは貴賤老若を論せず悉く淨土に往生ができること云ふ事は正しく宗教として的一大革命でなくして何でありませう。少くとも聖道自力の從來の法門に對しては全く想像もできない宗教の反逆であつたのであります。

（一九三二、三、二）

人生の眞意義（其の一）

（宗教と人生）

土屋 觀道 述
安田 恢順 記

目次 Ⅱ 人生の眞意義とは人生如何に生きて行くべきかの問題
—— スフィンクスの喩を以つて一般を談ず、—— 動物的四本足—— 文化的二本足—— 宗教的三本足—— 人心要求の表現—— 孔子天命を知るこゝろ—— 如來心に隨順すべき事—— 人間は今一度生れ更るべきこゝろ—— 佛教は必ずしも未來を待たぬこゝろ—— 鶏の卵の譬、—— 佛子の自覺たるべきこゝろ、—— 佛子と菩薩。

午前より宗教と人生と云ふ題の下に御話して居りますが、午前は宗教と云ふ方面を述べましたから此席では、人生の意義を明らかにしたいと思ふのであります。

人生とは

人間一生の事を云ふのでありまして、其意義とは、人が此の世に生れて「何をなすべきや」と云ふことであります。言葉を替へて言へば吾々は「如何にして此世を生きて行くか」と云ふ、人生の根本方針を明らかにするの謂であります。

凡人が此世に生れて、現にこゝろして生きて居ると云ふことは誰しも疑はれない事實であります。乍然それが今後如何に生きて行くかと云ふことを最も明確に承知して居る人は極めて少ないことと思ふのであります。此の人生の問題がハツカリとなつて居らぬと、自然心の不満が絶へないのであります。それに付て私は先づ一つの譬を出してこの御話を進めて行かうと思ふのであります。それは彼の阿弗利加に埃及と云ふ國がありますが、このエヂプトは世界最古の國の一で一萬年からの歴史を以て居ります。

然に、此國にズーツと昔から言ひ傳へられて居る一つの神話がある。それは

スフィンクス

と云ふ不思議な怪物があつた。體が獸の姿をして、面が人間であつた。是の像は今の小學校の地理書にも出て居ることだから、小學校の生徒でも知つて居ることであり

ます。而して其獣がナイル河の畔に住んで居て、其處を通る人があると、必ず一つの謎をかけるのであります。そして多くの人は其謎をヨウ解がない爲めにそのスフィンクスの爲めに食はれて終ふのです。其謎は「朝に四本足であるき、晝になると二本足になり、それがまた夕になると三本足になつて歩く者がある、一體それは何物であるか」と言ふのであります。今日の人はコンナ事を言へば直ぐにナンデモなく答へるかも知れぬ。それは已にそれが何であるかを永く教へられてゐるからであります。乍然、其の當時の人はコンナ事を教へる人がなかつたからヨウ答へうるものはありませんでした。その爲めに澤山な人が其の怪物の爲めに多く食はれて終つたと云ふことであります。此の事を非常に愛えた一人の青年が大いに義奮を起して、その謎を解かうといたしました。

そこで彼は自ら進んで、ナイル河畔に行き、其の怪物の前に立つて、その謎を聞かうとしました。處が其の怪物は案にたがはず直ちにその青年に向つて前の謎をかけたのであります。青年は暫く考へに冥つて居りましたが遂に其れは人間であると答へたのであります。スルと其怪物は直ちに自分の身を振り立てて、其青年を飛び越へて河の中へ飛び込んで死んで終つたと云ふことであります。

す。其れ以來其の怪物は再び埃及には出ない様になり、人も食はれずすむやうになり、今日の埃及人は皆その青年の子孫であると云ふのであります。今日遺つてゐるスフィンクスはその時當のスフィンクスの記念像だと云ふのであります。然乍ら

此謎は一たい何を意味して

居るのでありませうか。生れてかう手足で、葡萄間は四本足でそれからやゝ生長して、立つて歩くのが二本足で、年老つて杖を用ふるやうになつたのが三本足と云ふことは成程考へて見れば私共人間の一生に違ひない。乍然斯く四本足から二本足になつて、三本足と變化して遂に墓場へ死んで行くのみが人間の一生と云ふのみならば此の謎は大したものではありません。それ位のことならば誰だつてよく知つてゐることであるからであります。けれども誰しも知つて居りながら此本趣を自己の生活に引き當て、深刻に考へて居る人が果して幾人あるでせうか。そこに此の問題が非常な意味を持つのであります。尤も此の人生をたゞ此の謎のやうに外面的に小兒から青年に、青年から老年となつて、一生を終るとのみ見るならば多くの人はやはりそれなりで死んでしまふのであります。此の傳説は青年の人間と云ふ自覺でスフィン

クスが死んだところにその値打があるのであります。此のスフィンクスの姿を外面から眺めると、其儘が自覺せぬ人間の姿であります。

所謂人面獸身

とは人面獸心のことでありませう。又これを精神的に内面から視るならばそれは人類生活の發達進化を物語つて居ると云つてもよいのであります。即ち四ツ足に葡萄と云ふことは吾々生活の動物的時代を表し、之れが二年立ちとなつたところは吾々が動物的肉食生活から離れて、人間生活としての眞意義でありませう。又これを文化史的に眺めると、下等な動物は手で物を握ると云ふことがなく、四本ながら體を動かすのに使つてゐる。而し動物と違つて人間は手で物を握り、足で歩行をするやうに四本の足が手と足の二方面に分化するのであります。然し猿となると葡萄と立つとの兩方面をなすが、而し常に立ちトシに計りは出来ない、即ち立つ時は遠見も遠聞きも出来るが、直ぐと四本足となり、頭を下げるから他の動物と同じ行動をやるやうになる。然し首が肩より上にあると云ふことは非常に進歩した表現であるさうです。處が、人間とまで發達すると常にそれが立つて遠近に注意ができる、そこに一つの進歩があるのであります。之

れは物の進歩する状態を示したのであります。然し物を見るに付て西洋方面はイツモ物質上からのみ物を見る習慣があり、東洋では之を反對に主に内面的視察を下す傾きがあります。之はスフィンクスのことに付ても符合する話であります。東洋諺に人面獸心と云ふ語がありますが、それは人としての體を持ちながら獸にも等しい行いをする心であると云ふことでありませう。乍然それを一つの圖像に現はせば全く此の阿弗利加で云ふ處のスフィンクスがそれでありませう。即ち面は人面であり、身は獸身である。

今、エジプトの人達が已にスフィンクスが死んで吾々の青年の子孫であると云ふことはつまり、人面獸心のスフィンクスの子孫でないことを意味して居るのであります。即ちスフィンクスが死んだと云ふことは人間の顔して畜生のやうな行ひをなす動物生活が止んで、人間としての生活をする、人の子孫であると云ふことを意味したものでありませう。更に、第三に彼等が

三 本 足

となつて歩くと云ふことは何を意味してゐるか、三本の中の一本は云ふまでもなく、老人としての杖に違ひはありませんが、その杖を精神的に見たら、何でせう。之は

神にたよるとか、神の道によるとか言ふべきものではないでせうか。そこに彼等が自ら日の子孫、即ち太陽の子孫として自らを神の子として見てゐるところに人格的誇りを見る。ことが出来るではないかと思ふのであります。之は我が國の國民思想にも非常によく似た點があると思ふのであります。實に面白い話であります。

乍然本當の意味に於て、果して幾人が此のスクインクスたらざるものがありませう。言かへれば未だ本當に此の謎を解した人は世界に幾人もはないかも知れませぬ。中には今も尙スクインクスにも劣つた動物的行動をして恥ぢない者さへ多く見受けるのであります。然し此のことは東西思想の考へ方が非常に一致して居るのであつて、東洋は行動に出る精神を中心とするに、彼れは外面を中心とする出かたではあります。心内には色外に現はるで結局は二つとも一つとなるのではないかと思ふのであります。然し根本が弱くして枝葉の盛ゆる木は無いやうに、

精神の根本

に特に注意を拂ふことは殊に東洋特に我國としての良い見解かと思ふのであります。
中にも此の杖をつくと言ふことを宗教になると私が見

たのは間違いでせうか。私は人生として、此の第三の杖によると云ふことを最も強い意味に見たいのであります。従つて、謎に於て、人間が杖をつくと言ふことは人間はやがて宗教と云ふ杖を持たねば完全な人とは言へないと云ふ事を物語つて居ると私は考へるのであります。即ち人は凡てその心中を割つて見ると、皆何物にかタヨリ度ひと云ふ心を持つて居るのであります。之れが人として自然の中に、宗教心を持つて居ると云ふ證據であります。而も人として完全な自由と向上とを心の中に叫んで居るのは即ち人は人間として完全な世界自由な境地をタドる處の本心の持主であると云ふことを示すものであります。従て、人間として、人は動物的生活以上、即ち完全な人格的價値の生活を自らしやうとするには、自らして自己本心の要求である、天地の大道に依らなければ生きて行けぬのであります。天地の大道とはそれが宗教の道でなくて何でありませう。此の道なくしては自己の本心の満足は得られないものであります。此のことを

孔子聖人

は吾れ「五十にして天命を知る」と云はれてあります。「天命を知る」とは即ちこれ宗教を指して居る語であります。此の「天命」と云ふことを註解して、「天の命は

を性と云ふ性に隨ふ是れを道と云ふと言つてあります。之れは人の踏むべき道を示され、而も人は天の命に従ふのが本意であるとせられたのであります。人は天より一大使命を授けられて居るのであるから、人は其の本當の使命を發揮して行くと言ふことが本當の人生であると、自己本心の要求すべき根本を示されたものであります。ソコで吾々も此の日本國民として且つ又社會の一員として、一體何を爲すべきかと云ふ自己の使命を見出さねばならぬのであります。佛教では此の人の踏むべき道を、如來の御心に隨順せよと言はれて居ります。若し吾々にして此の如來心已外に心の働くときは之は皆利己主義となり、私利私慾を中心とする動物的行動に外ならなくなるのであります。

以上斯くの如くスクインクスの傳説を人生の一生として、三段階として見たことは甚だ面白く見方でありませぬ。然し今日から見れば之は甚だ幼稚な言ひ分ではあるが一萬年已前の人達が斯様な事にまで人生を見たと言ふことは誠に尊ひことと言はねばなりません。

印度に於ても

釋尊の當時、及其れ已前の思想としては、人間はもう一度生れ變らねば、本當のものとなることは出来ないと思

へたものであります。丁度、鶏の卵と子供の齒は今一度甦せなければ本物でないと同じやうにと言つたものであります。子供の齒は一度抜け更はらないと眞物でなく、鶏の卵は今一度生れ更はらないとひな鳥とはなれないやうに、人間の心も此のまゝでは眞の人格的完全なものとなることは出来ないと言つたものであります。その意味は人間の心が今一度宗教の世界に蘇生して初めて本當の人間となると云ふ意味であります。然しこゝに更生と云ふは必ずしも死後の更生をのみ意味するものではありません。それは釋尊としての信仰は、人は此儘捨てゝをいては、益々那落の淵に沈むより外はない。乍然、一度眞實の宗教に目醒めて、そこに更生するならば其儘永久不滅の涅槃界に到ると云ふのが釋尊の御自覺でありました。そこには必ずしも死後を待たない宗教でありました。本當の信仰に入て、眞實の人生の意義が発見されたなら、ソレこそ未來を待たない甦生の世界が現はれて來るのであります。釋尊は自ら其の眞實の相を覺り、完全なる人格は

眞實の信仰

であると云ふ事を體驗せられたのであります。當時波多門教徒の教ふる、人間には四性の階級が嚴重

に區別せられて神の支配下にあつたのであります。いはゞ神の努隷に等しいものであります。然し釋尊の佛敎はそれ等の思想と異つて、眞の涅槃と云ふものは四ツの階級によらずして、宇宙の眞理に目醒むるもの等のしく入るべきところだと敎へられたのであります。

其涅槃とは即ち無量壽、無量光の世界であります。委しいことは後日細説することに致しますが、ソナナ尊い涅槃の世界に然らば如何にして到ることが出来るであらうか。そのことを今から少しく述べて見たいと思ふのであります。

昔から「鶏の親は卵か、卵の親は鶏か」と云ふ話があります。之は卵を産んだのは鶏であるから鶏が、親であるが、又鶏は卵から生れて来るから卵がその親のようでもありませう、理論としては一應どちらも最もらしい詞であるが、然し誰れしも鶏の卵を鶏の親だと云ふたり鶏の子が卵だと云ふ人はありません。鶏の子と云ふときは卵でなくして、直に卵から生れた、雛鳥を指すのであります。そして、卵はただ雛子となり得る性質を持つて居ると云ふ丈であります。それと同じく吾々も元來

佛となり得る

性質を持つては居りますけれども、卵が親鳥に温めら

ります。而も、此の世に於ても動物的行動に耽るやうな人間が、斯くして佛子の生活にまで變化し得ると云ふこと

日華周遊所感

□今頃になつて、支那を見て來た感じを書くに云ふことは少々時期遅れであります。かと云つて詳しいことを書く暇もなく、それは後日に譲るとして、今その所感の一端を述べておきます。

□先づ支那を見て感じたことは支那の本土の大きいなあと云ふ感じでした。地圖を擴げて見ても判るやうに、支那の國土の廣大なことはお話にならぬほどですが、僅廿日ばかりの旅でさへ、さすがに支那は大きいと云ふ感じを痛切に與えられました。見渡す限り廣東や上海、杭州や蘇州、楊子江の平野などは全く驚くばかりの平地です。

□地圖の上から見れば私共の旅したところは丸で全支那の十分の一にも當りませんが、日本の内地を旅した經驗を持つ私共にはたゞそれだけでも支那の大きくて廣いと云ふことは充分に感ぜられました。山と云ふ山さへも録に見ないのですが、支那の奥地や滿蒙の全土など之に加へたら大したものでせう。

□殊にかねてから楊子江は大きいと聞いて居りましたが

れ、雛となりソコデ初めて鶏の子となるやうに吾々も如來の大慈悲に温められて眞の念佛者となつたとき初めて佛子と呼べるのであります。之は私共が精神的に更生したときを言ふのであつて未だ本當の信仰にも入らず、何等精神上の誕生もなければそれは佛子とは言へぬのであります。いはゞ信仰もない此儘では未だ本物ではない譯であります。ソコデ吾々は今までの動物的生活から人生の眞意義に醒め、眞實の宗教に入つて、如來の子とならねばなりません。斯くて如來の慈光に温められて眞實の信仰生活となつたとき、自然に佛子となるのであります。而もその信仰の生長はやがて、自ら佛子としての自覺も出來、そこに未來を待たずして眞味ある聖的新生命をも既前し得らるゝことになるのであります。

而して此の

信仰に入つた者

を佛敎では佛子となづけ、又菩薩とも名くるのであります。又一名佛子と申しても差支ありません。菩薩とは自ら人生の眞意義を自覺すると同時に又他にも佛子たることを覺らしむるの人を云ふのであります。即ち自らも人生の意義に醒めてやがて佛の如くなり、他にも此の道を説いて佛の如くならしめやうと努力する人を云ふのであ

實が佛敎の教へであります。

(一九三二、二九夜再校)。

土屋觀道

に行つて見て成程之はと感しました。どう考へてもまた河だと云ふ氣がしないのに船はもう海から河へさかのほること何十哩と云ふのです。向ふの河岸を見やうとしても全くそれが見えぬばかりでなく、望遠鏡でさへ判らぬ位、河幅が廣いのです。

□多くの小蒸汽や大蒸汽が丸で航海でもするやうに見えるのでした。水は濁つて居るが流れてゐるかどうかさへ判らぬ位に静かです。見たところ、日本の瀬戸内海でも航海すると思つたらよいでせう。

□尙町に上陸して感じたことは支那人に對する氣持のよいことでした。少しもいやな感じがしないのみならず幾分好奇心からでもありません。寧ろこちらから近づいて見たいやうななづかしさをさへ感ずるのでした。排日など云ふ氣はどこを探してもないやうでした。ところどころには排日宣傳のビラや大きな立札なども見たことがありますがそれはたゞそんなものがあると云ふだけで、支那人に對して、そんな氣はいがあらうとは露思え

ませんでした。

□殊に支那人の町に入つて、その品物など買ふものなら全く、彼等の商賣上手なものには驚くばかりです。品物が安くて、買いよくて、少しもいやな感じがせないのです。中には中にも少々大きい店になると大概のものが日本語を使ふが英語を使ふのです。そして彼等の商賣に熱心なのは全く感心するより外ありませんでした。

□中には大きな掛値を云ふものもあるし、また全々擬物を握らせるものもあるとのことでしたが、そのかわりこちらがよく眼が届いて居ればそれらにかゝる事はありませんまい、日本でも東京の銀座の夜店のやうなところばかりを歩いたら支那も日本も同じ事です。支那でも掛値をせぬ正直な正札の店も多数ありました。

□銀の相場の関係もありましたらうが、又關稅の關係もありませうが支那の内地で出來た品物には安くて立派で欲しいものが非常に多いのを氣づかすには居られませんでした。何せよ彼等はお話にならないほどに生活費が安く、辛抱よく品物でも造るのださうですから、日本品よりも安いことは言ふまでもありません。

□否、そればかりでなく、同じ日本品でさへも日本の内地で買ふよりも或る品物の如きは支那で買ふ方が非常に安いものがあります、それは小賣費が日本よりも安くて

すむからかも知れません。その上殆どの店を見ましても、品物がどつしりと並べられてあつて、店の祐福を示すやうな氣さへせられてなりませんでした。そこに行くとい日本の店は支那人の店に比べて、新しく小さくて何となく貧弱な感じを與えます。

□之は家の造りまで何となく先方の方が日本の内地より大きく落つきがあるやうでした。之は特に廣東や上海に於ての店がさうであります、その他はさうゆつくり比較することもできませんでした。

□次に感じたことは支那人の食物と衣服のことでした。然し之は私共としてはたゞ珍らしいと云ふばかりでなく、割合に滋養に富み、食べるのに食へよい感じがしました、衣服などは特に支那服の方が寒暑共に適し、又運動上にもよく、經濟的にもよいと聞きますが日本服よりもよいやうな氣もしました。

□たゞ支那の婦人服と日本の婦人服とを比べましたときはさすがに日本服の方がよいとはどうしても思へませんでした。それでも彼地に於ける日本婦人は殆どすべてが日本服を着てゐるやうですがやはりそれでも日本服がよいのでせうか、仲々に一度いつた習慣と云ふものは變りにくいと聞きますが、日本の婦人服殊に野外服などは一刻も早く改造して欲しいと思ひました。

□支那の婦人の大部分は若い人に限つて斷髪でした。服

装なども靴や靴下などは西洋風であり、其他の服装は支那服でしたが仲々に見かけもよいやうです。而も支那人の斷髪は決してなまいきだとか見にくいとか云ふ感じがいたしません、そこは支那人だからと云ふ感じが多く伴つてゐるからかも知れません。

□尙都會に入つて感じたことはどこを歩いても人間の多い事でした。どうしてまあ、こゝも人が多いのかと思はれるほどでした。之なら人口四億萬と云ふこともまんざら偽ではないかも知れません。丸で淺草や銀座の夜店でも歩くやうな感じがしました。尤も私共の案内せられたところが多くは繁華なところばかりであつたからかも知れません。

□尙私が各地を廻つて感心したものはいかにも彼等が各自の仕事に熱心な點でありました。殊に我が日本人に比べて著しくうらましいとも感ぜられましたことはそこへ行つても彼等が至るところの日本人町に入りこんで來て、その中で成功して行きつゝあることでした。之は偏へに彼等の生活費が安いが爲めに、同じ品物を商賣するにしても日本人より安く賣ることが出来るからでもありませんか。更にそれより、彼等がいかにこの道の商賣に熱心であるかと云ふことはその成功の第一要素でありま

せう。

□之は又日本人の大部分が未だ永住的な心がないのと仕事に熱心さが足らない上に、生活費が非常に支那人に比べて高いと云ふことが支那人と競争ができぬのにあるかも知れません。一例をあぐれば一儲けしたら早く本國へ歸らうと云ふのが日本人の僻であります。そしてまた、十錢や二十錢の儲では一日の生活ができないのだから、それ位なら寧ろ寝てゐる方がましだと云ふのが日本人の考です。

□ところが支那人はそれでもよく食つて行けるのですがその上に五錢でも十錢でも寝てゐるよりは増したと云つて働くのださうです。そこになると日本人は全く彼等の相手ではありません。それに支那は自分の古郷ではあるし、永住的に一生をかけて努力して行くと云ふ氣永さだから、到底彼等と競争もできぬのであります。

□尙その他の事について感じた事がありますが、それは後日に譲るとして、今後の滿蒙問題にしても、今のやうな日本民族の根本ならとても前途はおほつかないことと思ひます。已に朝鮮、滿洲、樺太、臺灣と、その他の青島上海を一巡し見た私の考へとしては之等の點に於て非常なる國民の反省があると思ふのであります。

□若しも今までのやうな日本民族でありましたならば、

今後の滿蒙がたとい日本の領土となりましても、恐らくは今日の臺灣や朝鮮、以上には發展し得ないは事明であります。否れどころかやがてはそれ以上に支那民族の爲めに、あらゆる經濟上の壓迫を來たさぬものとも限りません。

□尙此の外に私の感じたことは臺灣と云い、滿洲と云ひ日本民族の移民の數のあまりに少いこととあります。之は主として我が政府當局の殖民政策の當を得ない點もありませんが、尙我が日本民族が殖民的經驗を持たないと云ふことも大なる原因かも知れません。

□乍然どんなに之等を以つてそれを割引しても、日本内地にこそせよしてその日の暮に困つて居るよりも、思い切つて之等の海外に殖民することは目下の急務でありませう。そして、どんなに困つたと申しましても、まだ日

本内地で困つて一生を徒に送るよりも海外に出て行つた方がどれほど増か知れませぬ。

□それには此の上ともに云ふまでもなく、我が國の殖民政策が充分の保護が大切です。そしてその中でも最も急務なるものは民衆自身への利益の分配を充分に考へてやると云ふことです。或は各地に宣傳して、その殖民を賞勵し、その發展策として、大資本家の海外投資はもとより、その土に擧る多くの利益をも本國に吸収することのみを計らずして、その土地に放下することとあります。

□此のことは或る意味に於て殖民地發展の根幹を爲すものであります。而もそれはその土地をして殖民民衆の領土たらしめ、又殖民民衆の安樂の土たらしむる上に於てどうしても考へねばならぬ事であります。

(一九三二、二、二九追記)

支部通信

大石支部報告 昭、七、二、廿八

○支那組織結成の件

當支部に於ては、豫てより會員各氏によつて、會の組織化を提唱されて居りまし

た。がいろ／＼な事情によつてそれを實現されずにおりました。

先一月廿六日、久々に土屋上人の御巡錫を得、且つ片岡様も隨行せられ、全國同盟組織結成について激勵あり。機運にわかになつて、こゝに去る十日定例念佛會の節、第一回の協護を行ひました。更

に廿三日の定例座談會には、定刻時間前より集合して、これを再協議し、會則を決定し、直ちに會員は署名し、こゝに於て我が大石は全國同盟の一分子として、組織を持つて新生しました。右御報告致します。

○當支部の情勢

この近來未曾有の不景氣は、我が農山村をも極度に重壓しました。飯米の半分量を村外よりの供給に依つてゐる當村として、米價の暴騰は直ちにパンの脅威です。養蠶を以て唯一のドル函としてゐる當村に於て、生糸の暴落は生活を極度に壓迫し、更に最近肥料の暴騰によつて、農民の生命線は音を立て、陥没しつつあるのであります。木材の暴落と賣行不振とは唯一の賃労働を解消し、木炭の暴落は更に之を深刻ならしめて居ります。労働者の賃銀は五十錢を割らんとし、否現に割りつゝあるの有様です。然もそれさへも容易に得難い現勢です。一月二十

五日を働きたさしても、得る所僅かに拾貳圓五拾錢、數人の家族を背負つて、あえぎつゝも、生きて行かねばならぬの農民こそは悲惨の極でないでせうか。この中から毎月幾らかづつの會費を出し合つて、三文の利益にもならぬこの信仰運動を續けて行かうとせられる會員諸氏の雄々しくけもなげなる姿こそは只々感激の外ありません。

眞生同盟はブルジョアの集りださ嘲笑さ

れてゐるやうですが、こうした展型的なプロレタリアの支部のありますことを興味を以て御記憶願ひます。やがてはこゝの展型的プロレタリア支部が、全村を動かす力となるであらうことを御期待願ひます。そして各地先輩及道友諸賢の御聲援を念願致します。

東京 山田峯子
専心に念佛上ぐる吾は、を
つたひつきせぬぞんげの泪
朝を上ぐる吾念佛に心きよみ
心なごみて今日を生き行く
御佛の前に座したる吾姿
此姿して常にあらまし。

私の三月傳道日豫定

土屋 觀道

- 四日夜 東京芝學寮
- 六日より五日間 柏崎町眞光寺 別時三味會
- 十二日 神戸東極樂寺
- 十三日 大阪市天王寺區眞松院 朝から念佛會
- 十四日夜 和歌山市鈴丸町法蓮寺
- 十五日夜 同縣黒江町東山保養庵
- 十六日夜 大坂市南區南編屋町

- 十七日夜 豊田省三氏方 尼ヶ崎市大物町圓平寺
- 十八日 四日市眞生製陶所
- 十九日 桑名町五井病院
- 二十日 名古屋市 西區千歲町崇徳寺
- 二十二日 静岡縣焼津町光心寺
- 二十三日 静岡市譽田町華陽院

以上

道友 原吉郎氏が新瀉縣から再度代議士に當選せられ、津市長、堀川美哉氏が同衆議員として今度出馬せられましたことを道友と共に御喜び申上ます。

眞生會

道友 柏崎町山田ミテ子女士 津市長谷川ひさ子様 が御他界になりました事を謹んで御弔詞申上ます。

眞生會

すまいか。今日の四月は單なる四月ではありません。(念)

行基寺別時三昧會案内

時 四月十四日午前五時開白
同 二十日午後五時閉會

所 岐阜縣海津郡城山村行基寺。

(養老線美濃山崎驛下車約五丁)

師 土屋觀道上人

○上人は十三日夕方御着。
○十三日夕方までは驛まで出迎へます。

主催 行基寺

◎全國の同志に告ぐ

四月行基寺の三昧會には夜間を利用して、十六、七日二日間全國眞生同盟の規約並に發展案を相談す、願くは愛宗の同志進んで参加あれ。

全國眞生同盟會

誌代拂込者並寄贈者御芳名

- 金參拾圓 佐屋黒宮平八様、○五圓 東京 都築七太郎様
- 壹圓宛 柏崎 桑山對池様、後瀧莊次郎様、大橋スイ様、△東京 大屋安一様
- △愛知 藤原様、△佐賀坪田隆賢様、浦賀三次六兵衛様、○貳圓 岐阜 長源寺様、
- 參圓宛 鶴見 田村亥三男様、△半田内田忠平様、○拾圓 岐阜 井深春枝様

定價誌本
一部 金十錢 郵税共
半年 金六十錢 同
一ケ年 金一圓 同

注意の文注
 〓購読希望者は代金を添へて御申込下さい。
 〓誌代は總て前金御拂込の事
 〓送金は振替によるのが便利です。

昭和七年三月十日印刷納本
昭和七年三月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀道

東京市外澁谷町中通二ノ四二

印刷人 副島 慎夫

東京市外澁谷町中通二ノ四二

印刷所 丹丘舎印刷所

電話青山七五之番

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日
第三種郵便物認可)

昭和七年三月十日印刷納本
昭和七年三月十二日發行

(毎月一回十二日發行) 第十一卷第三號